

支倉常長の功績たたえる

若宮丸と比較 慶長使節400年シンポ

慶長使節400年記念シンポジウム「出帆400年に向かって」は3日、石巻市渡波の慶長使節船ミュージアム(サン・ファン館)で開かれた。仙台藩士・支倉常長率いる慶長遣欧使節団が月浦を出帆し、来年(2013年)で400年を迎えるにあたり、改めて使節団がもたらした歴史と文化、意義を見つめ直そうと慶長遣欧使節船協会と仙台市博物館が開いた。県内各地から歴史ファンらが多く訪れた。

はじめに元仙台市博物館長、佐藤憲一氏が「大使支倉常長とその人となり」をテーマに基調講演した。続いてのディスカッションでは、石巻若宮丸漂流民の会事務局長の大島幹雄氏、石巻市教育委員会生涯学習課課長補佐の佐々木淳氏がパネリストとして登壇。ミュージアム館長の濱田直嗣氏がコーディネーターを務めた。

はじめに元仙台市博物館長、佐藤憲一氏が「大使支倉常長とその人となり」をテーマに基調講演した。続いてのディスカッションでは、石巻若宮丸漂流民の会事務局長の大島幹雄氏、石巻市教育委員会生涯学習課課長補佐の佐々木淳氏がパネリストとして登壇。ミュージアム館長の濱田直嗣氏がコーディネーターを務めた。

異国の地で7年間を過ごした乗組員について「生存率が高く、海外生活への適応力があった」と考えを述べた。その上で、貿易のため積極的に海を渡った慶長使節団と、若宮丸との比較の意義を語った。

佐々木さんは、「慶長使節団の目的が成功していたならば、東北が別の国家となりえたのでは」と語り、統一国家として日本で初めての外交を行った使節団の功績をたたえた。

質疑では、積極的に質問する参加者の姿が見られた。巨理町から来た女性は、「帰国後の常長の情報は伊達政宗の執政にどう反映されたか」と質問。佐藤氏は「支倉の報告を政宗がどれだけ理解したか分からないが、ヨーロッパの情報には関心を持ったはず。政宗の国づくりにどう生かされたのか、今後調査したい」と語った。

質疑では、積極的に質問する参加者の姿が見られた。巨理町から来た女性は、「帰国後の常長の情報は伊達政宗の執政にどう反映されたか」と質問。佐藤氏は「支倉の報告を政宗がどれだけ理解したか分からないが、ヨーロッパの情報には関心を持ったはず。政宗の国づくりにどう生かされたのか、今後調査したい」と語った。

シンポジウムは18日午後1時30分から仙台市博物館でも開かれる。問合せはサン・ファン館 ☎24-2210。

石巻日日新聞に若宮丸をテーマにした小説「我にナシエーシタ(希望)あり」を連載して



議論を深め、慶長使節団の偉業を見つめ直したシンポジウム